2004年度第8回物学研究会レポート

「家族を容れるハコ　家族を超えるハコ」

上野千鶴子氏

（東京大学大学院教授）

2004年11月30日

BUTSUGAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

第8回　物学研究会レポート

2004年11月30日

11月の物学研究会は東京大学教授で社会学、特にジェンダー論やフェミニズム、家族社会学がご専門の上野千鶴子先生をお招きしました。上野さんは社会や女性の変化、家族と住まいとしてのハコ、ライフタイルの変容に注目し、建築家とのコラボレーションにより新しい住宅モデルを探求しておられます。今回の物学研究会では、家族の多様化、現在の住宅環境、生活や価値観の変化などを背景に、新しい「ハコ」の可能性についてご講演をいただきました。以下はそのサマリーです。

「家族を容れるハコ　家族を超えるハコ」

上野千鶴子氏　（東京大学大学院教授）

①；上野千鶴子氏

社会学者が住居を語る理由

こんばんは。私は社会学者として女性学、ジェンダーについて研究してきました。が、同時に家族を切り口とした都市やコミュニティについても都市工学者や建築家たちとの研究会や調査を行い、1992年に出した『家族を容れるハコ　家族を超えるハコ』（平凡社）はその成果のひとつです。ところがこの本は建築業界に一石を投じることになり、その波紋から、今年10月には『51C家族を容れるハコの戦後と現在』（平凡社）を出版しました。

ところで物学研究会の皆さんはデザイナーだそうですが、人間の一生で一番大きな買い物といえばなんでしょうか？　それはもちろん住宅です。本日は「住宅＝家族を容れるハコ」という意味で話を進めます。私は建築家の中でも公共的なモニュメントを設計する人よりも住宅建築をやる人に興味を持っています。そうした建築家であっても多くは外装や空間処理にこだわりますが、私はむしろ住宅の内部空間がどう計画されるかに興味があります。そういう関心を共有できる数少ない建築家のお一人が山本理顕さんで、彼とのコラボレーションから先の2冊が生まれました。

戦後住宅、51Cモデルの呪縛

戦後の集合住宅は、俗に「51C」と呼ばれている公団住宅のモデルから始まったと言われています。これは1951年に公営住宅標準設計の一つとして設計されました。 当時、基本設計にA型、B型、C型という３つのモデルがあって、C型が採用され、そこから「51C」と呼ばれるようになったわけです。35平米という最小限住宅のモデルでした。これがその後も日本住宅公団に引き継がれて、公共住宅の原型となったわけです。設計者は当時東京大学建築計画学研究室の大学院生だった鈴木成文さんです。

プランの特徴はキッチンと2つの寝室から成る2ＤＫであることです。基本理念は寝室の世代分離と食寝分離のふたつです。要は夫婦の寝室を確保しよう、夫婦と子どもを別の部屋に寝かせようというものです。つまり戦後住宅の理念は夫婦寝室を確保して子どもと親を分け、さらに食と寝の場である公室と私室を分離することであったわけです。その後、大量に建設された公営の集合住宅は「51C」というユニットをそのまま縦に積んだもので、規模の大小に関わらず基本的パターンは同じでした。

では、51C以前の日本の住宅間取りはどうだったのか。典型的なものとして「田の字型」と言われる戦前の農家の間取りがあります。これは土間が玄関でそこから入ってくる。土間の隣の台所と出居が並び、出居には必ず囲炉裏がある。出居から座敷を通ると納戸があり、そこで家族が眠るというものです。面白いのは座敷に家長夫婦が眠り、納戸で他のメンバー全員が雑魚寝していたことです。

さて、戦後の日本では、51Cが登場する頃から夫婦と子ども２人という核家族が急増し、住宅においては夫婦と子どもの寝室、食と寝の分離が進みます。そして茶の間の風景といえば、ちゃぶ台がテーブルと椅子に代わり、家長たる父親はテレビの良く見える席に座り、そこが家長席となりました。ところがしばらくたつと、多忙な父親不在の母子家庭化が進み、家の中心はテレビが占めるという皮肉な状況になっていきます。

「ｎＬＤＫ」モデルとの格闘

ところで「概念＝コンセプト」を考えるとき、社会学者は言葉によって考察しますが、デザイン系の方たちはモデル化、視覚化を試みます。集合住宅に関して言えば、1970年という時代に、一人の建築家がモデル化にチャレンジしました。当時大学院生であった山本理顕さんが51Cの理念のモデル化を修士論文としてまとめたものです。

そこで山本さんは、両親に子ども2人という標準世帯を想定しています。モデルでは個室が３つあり、真ん中に家族全体のコモン（共有）スペースがあります。3つの個室は2人の子どもと夫婦の部屋ですが、実際には妻はひとり真ん中のコモンスペースに取り残されています。このように３つの個室とコモンスペース（リビングダイニングキッチン）から成る住戸を「３ＬＤＫ」モデルと呼びます。これは個室が４つ、５つになっても理念は同じ、よって変数である個室数を「ｎ」と表して「ｎＬＤＫ」モデルと呼びます。

ところで私は51Cを作り上げた鈴木成文さん（現在７８歳）と対面する機会を得て、そこで驚くべきことが分かりました。というのは、私は鈴木さんが設計された51CモデルこそがｎＬＤＫの原型であると考えていました。建築業界でさえそう信じている人が大半でした。けれども鈴木さんはきっぱ

り51CがｎＬＤＫの原型であることを否定なさいました。つまり51Cの理念をそのまま拡大してもｎＬＤＫにはならない、ということです。鈴木さんによりますと「51Cは、戦後の何もない時代の最小限住宅モデルとして苦心惨憺して考えた結果である。しかるに現在のｎLDKという画一化した住宅モデルのマンネリ化はゼネコンやデベロッパーたちの怠慢である。住宅の空間面積が広くなれば、それに対応する空間設計プランが当然出てくるべきであった」ということなのです。

建築家はｎＬＤＫを単純に「個室群＋コモンスペース」の集合だと考えます。ところが社会学者である私はここに新しい着眼点を見出しました。標準世帯とは夫婦と子ども２人の４人であるのに個室は３つしかない、ということは、ｎは家族の人数マイナス１という奇妙な数だということです。51C成立当初から夫婦は寝室を共有すると考えられており、このｎ＝家族数マイナス１からなるｎＬＤＫモデルは、21世紀になった現在も引き継がれていて、どんな間取りにも必ず夫婦共有の主寝室が設けられているのは妙なことです。

さて、家族は４人なのに個室は３つ。つまり、家に一番長く居る母親の居場所はコモンスペースであり、家族は外から戻ってくるとまず母親の居るコモンスペースを通過して個室に入っていくというのがｎＬＤＫモデル当初の姿でした。ところがその後、個室化がどんどん進み、最近ではコモンスペースに対して家族全員がドアを閉じるようになった。これを社会学では家族の個族化と言いますが、社会学者は早い時期から個室は閉鎖空間ではないことに気づいていました。つまり一見するとコモンスペースに対して扉を閉じているようだが、各個室は外部の世界にダイレクトに開いている。初期の頃であれば深夜ラジオやテレビのような一方向型のコミュニケーションでしたが、やがてパソコン、携帯のような双方向型のコミュニケーションツールが普及して、扉の向こう（個室）は外界と直接結ばれている。つまり個室はコミュニケーションのデッドエンドではなく、コモンスペースにはだれも居なくなったという逆転現象が起きました。そしてときどき気が向くと「家族する」ためにコモンスペースに出てきます。こういう変化が起きたのは８０年代以降で、家族であるという「ｂｅ」から家族するという「ｄｏ」へと家族の概念が変わってきた。オールウェイズ家族、フルタイム家族に対してパートタイム家族、サムタイム家族という概念が生まれました。当然のように主婦という役割も「フルタイム主婦＝主婦である」から「サムタイム主婦＝主婦する」に変わりました。山本理顕モデルは70年にすでに将来の個族化を予言していたわけです。

こういう考え方の山本さんは見事な命題を作りました。それは、家族が住んでいる空間を「住宅」と呼ぶのではなく、住宅という空間に住んでいる人々の集合を「家族」と呼ぶ。言い換えれば、住宅とは家族の規範が空間化されたものであり、住宅という内部構造を持った空間を共有している人々を家族と呼ぼう、と。これはまさに空間が人間のすべての行動を支配し規定できるという空間至上の発想です。私はこれを「空間帝国主義」と名づけました。空間帝国主義とは山本さんに対する私の最大のオマージュです。空間設計を天職と考えるならばこのくらいの気概を持っていただいて当然だということです。一方、社会学者は社会的変数によってあらゆることを説明しようと試みます。これを「社会学帝国主義」と言います。

住宅の理想と現実の乖離

ところで山本さんは個族化モデル、すなわち(n＋1)ＬＤＫモデルをそっくりそのまま実現してしまいました。1993年のプロジェクトでお医者さんがクライアントの「岡山の家」です。住戸の周りは塀で囲まれており、敷地内は屋根のないオープンエア状態。ここに夫婦と子ども１人のための個室が３つあって、各部屋は外から直接アクセスできます。オープンエアスペースを挟んだ向こう側に洗面所と浴室、食事室が別々にレイアウトされています。住人は雨の日も風の日も、暑い日も寒い日も、食事やトイレに行くにはそのオープンスペースを通らなければなりません。しかしながら、クライアントはとても満足しているそうです。

彼は91年に、この山本モデルをそのまま積み上げて集合住宅を作ってしまいました。細川護熙さんが熊本県知事だったときに実現した「熊本アートポリス構想」の目玉ともいえる「保田窪団地」がそれです。保田窪団地でも、各住宅の玄関側に複数の個室が配されており、オープンエアスペースであるブリッジを通ってコモンスペースである居間と食堂へとつながります。岡山の住宅のように、住人は吹きさらしのブリッジ（廊下）を通らないとリビングダイニングへ行けません。

ここにはさらなる仕掛けが用意されています。144戸の建物全体が中庭を囲むように配置されており、この団地共有の中庭には各戸のリビングに設けられた階段からしか行くことができません。公共住宅でありながら外のアクセスを遮断するという画期的なプランを実現したわけです。逆に言えば、中庭に入れる人々は保田窪団地に住んでいるという共通性を持った人か、その許可を得た人たちに限られます。欧米には昔から住人だけが共有するリミテッドアクセスをもったメンバーズオンリーのコモンスペースが普及していましたが、日本では画期的なことでした。

ところがこの集合住宅は空前絶後のプロジェクトでした。通常、公共住宅で新しいモデルが提示されると追随事例が出るのが普通ですが、保田窪には出ませんでした。その理由の一つが居住者たちの評判の悪さでした。私も保田窪モデルの斬新さは認めますが、一方ではデザインとは何か、ユーザーサティスファクションとは何かを考えざるを得ません。そこで私は1999年に、勤め先である東京大学社会学研究室の社会調査実習の対象を保田窪団地とし、学生、院生合計53人を連れて現地へ乗り込みました。144全戸を対象に、定量調査と定性調査を実施したのです。

調査で分かったことは、入居理由のベスト３は「早い、安い、近い」だったということ。これは低家賃、低コストの公営住宅の宿命です。入居者にとっては設計者がだれか、どんな斬新なデザインかということは関係ありません。たまたま入居募集があってすぐに入れるし、家賃も安くて、熊本市の中心部まで近い物件であることが最大の関心事でした。ところが実際に住み始めてみると、トイレへ行くためやご飯を食べるのに吹きさらしの廊下を通らなければならいとんでもない家だったというわけです。

私たちはさらに一歩踏み込んだ調査を行いました。すると満足度という点で入居者は二極分解していました。満足度の低いグループほど定住志向が高く、満足度の高いグループほど定住志向が低いという誠に皮肉な結果でした。これは何故かというと、満足度の低い人たちというのは単身の高齢者であり、以前の公営住宅が老朽化したために新しく建替えた保田窪に選択の余地もなく住むことになった人たちです。もはや配偶者も行き場もない単身高齢者がとんでもない住宅に入れられてしまったわけです。私は山本さんにお会いしたときに、「雨が多く、夏は暑く冬は相当寒いという熊本の気候風土を考えましたか」と尋ねたことがあります。回答は「いや、余り考えませんでした」というもの

で、やはりデザイン偏重であると思いました。しかしこれは山本さんだけの責任ではありません。このプロジェクトが実現した背景には、ある意味で細川独裁政権があり、建築によって熊本を活性化したいという別の意図が働いていたのです。

一方の満足度の高いグループは、皮肉なことに公営住宅は通過点の一つでしかない定住志向の低い若い既婚世帯でした。満足度が高い理由は、山本さんが意図した外界のリスクから保護された中庭というコモンスペースの存在でした。子育て世代の家族にとっては、キッチンとリビングから見下ろせる安全な遊び場に対する評価が高かったのです。

夫婦が変われば住宅も変わる？

住宅市場では、保田窪という画期的なモデルが登場しながら追随例はなく、相変わらずｎＬＤＫモデルが続いています。仮に51Ｃがその原型だとすると半世紀以上の耐用年数でですから、ひとつの商品コンセプトとしては驚異的な長さです。しかし正確に言うと、山本モデルもまたｎＬＤＫのラジカルな変更とはいえません。トポロジカルにみれば、あくまでもｎ個の個室群と１つのコモンスペースというモデルを踏襲しているからです。

そもそも、私たち社会学者の疑問は、nLDKに暮らすべき標準世帯がここ数年急速に減少しているにも関わらず、なぜ基本モデルが変わらないのか、です。鈴木成文さん流に言えば「第一はゼネコンとデベロッパーの怠慢、第二は文句を言わなかった消費者」ということになってしまうでしょうか。社会学という立場から住宅の記号学を考察すると、住宅におけるシンタックス（統辞法）とプラグマティックス（語用論）イコールではありません。nLDKのｎは家族の人数マイナス１であり、これには夫婦は共に寝るべきという規範にもとづいています。それを空間のシンタックスつまり文法とするなら、夫婦が実際にどういう寝方をしているかが空間のプラグマティックス（実践）にあたります。そのあいだにあるギャップを調査してみたいと私は考えました。

そこで88年には松下電工のＡ＆Ｉ研究所とコラボレーションして、夫婦の寝室が機能しているのかどうかを探る寝方調査を実施しました、寝室のシンタックス、つまり建築家による機能の指示には、寝ることとセックスすることの二つが含まれますが、結果はどうだったのか？　結論を言えば、寝室同室族は約86パーセント、その内ダブルベッド族は27パーセント、ツイン族が59パーセント、別室族が14パーセント。日本では夫婦同床は3割も居ない、年齢の上昇とともに別室派が増える、ということがわかりました。また後日本の住宅の洋風化が進んだといわれますが、食事室の洋風化に比べて、寝室の洋風化は遅れています。ちゃぶ台は消えてダイニングテーブルに取って変わられましたが、寝室はあいかわらず和室に床を延べる方式で、夫婦同室異床が一般的です。その中でファックスレターによるモニター調査も施し、実際の寝方を描いてもらいました。結果からは日本の家族の典型的な寝方が分かりました。子どもを真ん中にした川の字モデルであり、これは日本の雑魚寝文化の継承です。

92年に旭化成の『デュークスネット』という社内情報誌が、夫婦の寝方調査を実施しました。ＤＥＷＫＳというのは「ダブル・エンプロイド・ウィズ・キッズ」の略語で、ＤＩＮＫＳとは対照的に子持ち共働き世帯の家づくりを提案しています。この「夫婦の寝室ライフ」というアンケート調査によれば、別室派は１５％、それも年齢が上がるほど増えて50代以上だと４分の１を占めるという結果が

出ました。数字そのものは、私たちの調査と重なっており、驚きはありませんでしたが、私を驚かせたのは結果よりも、堂々とカップルに対して「別室ですか、同室ですか」と聞けるようになった社会環境の変貌ぶりでした。

と思ったら、なんと98年には『ことぶき科学情報』という配偶者探しの会社が出している情報誌に「配偶者との就寝形態」というデータが出てきました。これによると別室派は男が44．５％で、女性が45．２％だそうで、98年になると未婚者を対象とした情報誌でもこんなデータを出すようになった。夫婦の寝室へのタブー視がなくなったわけです。この意識変化こそがｎＬＤＫという住宅モデルを変える原動力になるのでしょう。

家族も変わればハコも変わる

ところで最近は夫婦関係だけでなく、家族構成そのものが急速に変わってきています。人口動態統計によれば、夫婦と子どもという標準世帯は今や33%に減っています。その次に多いのが単身世帯で、すごい勢いで増えています。もう１つ増えているのが夫婦世帯、それも高齢者夫婦世帯が増加しています。このように非定型的世帯の合計は既に標準世帯数を超しています。にもかかわらず住宅が相変わらず標準世帯向けに作られているのは、一体なぜなのかということを考えてみたい。これには大きく２つの理由がありそうです。一つはプロバイダー側の怠慢、二つ目は消費者側の幻想です。

1992年に「クリエイティブミズの住みたい家」というテーマで、阪神間の高学歴、高経済階層のアクティブミセス（ミズ）を対象とした住宅ニーズ調査を行い、その結果に基づいて5人の建築家（伊東豊雄、隈研吾、妹島和世、飯村和道、二井清次）に新しい住宅モデルを提案してもらうという企画を行いました。皆さんそれぞれ興味深いモデルを提示してくださいましたが、クリエイティブミズたちの評価は今ひとつでした。その理由は、4氏のプランのどれもがｎ個の個室とコモンスペースの集合という既存モデルを脱していなかったからです。各建築家の案を見ながら、私は「外界とのインターフェースでもなく、個人のユニットでもない、家族に閉じたコモンスペースでもない中間領域を空間として実現することは難しいのだろうか」と思うようになりました。では「まだ見ぬ空間」とは一体何だろうか？　クリエイティブミズたちのニーズにもとづいて、私たちはそれに「ラボ機能」という名前をつけました。5氏の中で唯一、二井氏だけが「ライフワークギャラリー」というコンセプトで中間的領域を提案していました。

ここで重要なのは「一体住宅とは何？」ということです。そもそもｎＬＤＫという住宅は戦後の高度成長期に誕生し普及しました。その背景には職住分離が行われ、そのために「住宅」という生活に特化した専用空間が登場したわけです。ところが有職無職を問わず、行動的ミズにとって住宅はもはや寝る、食べる、育てるための空間を超越しています。戦後社会の根底にあった生産は公的空間に、消費は私的空間に、生産はお父さんに、消費はお母さんにと明確に分離されていたものの境界が揺らいできているのが現状です。既存の住宅の機能は既に終焉を迎えているのではないか、というのが私の見解です。

夫婦からケアの絆へ

では、ｎＬＤＫを支えていた夫婦が中心である戦後の家族像はどこにいってしまうのでしょうか。最近の日本は「家庭に仕事とセックスは持ち込まない」という人が多いようですが、たしかに結婚することにおいてセックスのパートナーや居場所の確保という動機付けは減ってきています。セックスだけでなく、これまで家庭で行われていたことの多くがアウトソーシングされています。突き詰めて考えていくと、家族に最後に残るもの、それはケアしかなのではないか？　つまり、家族が育児、介助、介護の対象となるような依存的存在を抱え込まない限り、家庭や住宅といった私的空間や領域を維持する理由は小さくなっています。そしてこのケアも、社会化という名の下でアウトソーシング化が進んでいます。

ケアを核心とするハコとして、住宅が外部に対してアクセスを持つ必要が高まっているというのが私の考えです。ケアを社会化、アウトソーシングするためには、外に向かったアクセスがあるハコ、つまりヘルパーさんや介護士がすぐに適応できる機能的なハコが求められる。鍵ひとつで誰もが乗りこなせるレンタカーのような家。「住宅というものはモデルを持つ必要はあるが、個性を持つ必要はない」というのが私の考えです。

私は1994年に『近代家族の成立と終焉』（岩波書店）という本を書き、その後『家族、積みすぎた方舟』（学陽書房）という翻訳書を出しました。後者は「法的制度としての婚姻を廃止せよ」という考え方で、夫婦を家族の単位にするなということです。同書の著者であるマーサ・Ａ・ファインマンは、家族の核心を夫婦という「性の絆」から「ケアの絆」に置くべきだと主張しています。世の中が健康な成人からだけ成り立っていれば、家族の個族化や解体も可能です。ですが、依存的他者が居る限り、家族はなくならない。ならば「ケアの絆」というものを家族の基本に置こう、というのが彼女の主張です。

最後に千葉県にあるユニットケアのモデルとして運営されている高齢者福祉施設「風の村」をご紹介します。ここの基本的な考え方は、個室＋リビングから成る定員8人を単位としたユニットケアですが、気に入らなければ他の場所も選択できるというもので、「家族が、選べる共同性になる」という理念を実現しています。これは非血縁者からなる一種の拡大家族を志向しています。十分に健康なうちは都会で単身生活をやればいい。しかし自分が依存的な存在になったときに、こうした我が家と呼ぶべき場所、家族と呼ぶべき集団が必要になるでしょう。だからこそ、建築家やデザイナーの方々に対して、彼らのような人々をも包括しうる新しい家族に相応しい住宅モデルを提示していただきたいと期待しています。

以上

講師プロフィール
上野千鶴子（うえのちづこ）
1948年富山県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。京都精華大学人文学部助教授、東京大学文学部教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。主な著書：『近代家族の成立と終焉』（岩波書店1994年）、『ラディカルに語れば…』（平凡社2001年）、『差異の政治学』（岩波書店2002年）、『家族を容れるハコ、家族を超えるハコ』（平凡社）、『国境お構いなし』（朝日新聞社2003年）、『戦争が遺したもの』（共著、新耀社2003年）、『「５１C」家族を容れるハコの戦後と現在』（平凡社2004年）他多数

2004年度第8回物学研究会レポート

「家族を容れるハコ　家族を超えるハコ」

上野千鶴子氏

（東京大学大学院教授）

写真・図版提供

①；物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局
文責=関 康子

●［物学研究会レポート］に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
●［物学研究会レポート］に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1999～2004 Society of Research & Design. All rights reserved.